淑徳大学
SHUKUTOKU

アーカイブズ・ニュース

NEWSLETTER of SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

VOL.14
2017.02.20

CONTENTS

■ 山下清の絵を使った我孫子駅弥生軒の弁当の包紙 …… 1
■ 学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち　Ⅳ …… 2
■ 平成28年度淑徳大学アーカイブズ特別展
「知的障がい児福祉の先駆け―踏むな　育てよ　水そゝげ：久保寺保久と八幡学園―」開催 …… 5
■「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内 …… 6
■ 淑徳大学アーカイブズ日誌（2016年７月～2017年１月） …… 7

― 山下清の絵を使った我孫子駅弥生軒の弁当の包紙 ―

「日本のゴッホ」とも呼ばれた山下清は昭和９（1934）年に12歳で八幡学園に入園し、貼り絵の技術を習得しました。昭和15（1940）年突如学園を抜け出し、以後15年にもわたる放浪生活を続けた清は、昭和17年（1942）から７ヶ月ほど千葉県我孫子駅の弥生軒で住み込みで働いていました。彼が描いた我孫子駅の絵は、その後弥生軒の弁当の包み紙に使われました。（我孫子市・長沼友兄氏寄贈）

学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち Ⅳ

― 川田貞治郎・岡野豊四郎 ―

淑徳大学アーカイブズ　所長
長谷川　匡俊

今回は、長谷川とほぼ同時代に民間社会事業家として先駆的な役割を担い、戦前・戦後を通じて相互に交流のあった川田貞治郎と岡野豊四郎を取り上げる。二人は知的障害児教育・福祉の先覚者として著名で、近年、財団法人日本知的障害者福祉協会発行による、津曲裕次監修・同協会編集『天地を拓く―知的障害福祉を築いた人物伝―』（2013）にも詳しく紹介されている。本書に取り上げられた11人の先人のうち、施設設立の順で４番目と５番目にあたり、小論も本書に依るところが少なくない。また川田の実践には敬虔なクリスチャンとして、キリスト教の信仰がベースにあった。仏教者の長谷川と信仰は異なりながらも、むしろ同じ宗教者として深く通じ合うものがあったに違いない。川田と岡野は長谷川と同県人であることも忘れてはならないし、後述のように、長谷川は戦後ブラジル開教にも心血を注いでおり、そのなかで不遇な環境にさらされていた知的障害児の治療教育に手を染めることになるのも因縁を感じさせよう。

川田　貞治郎

出典：『天地を拓く－知的障害福祉を築いた人物伝－』（2013年、財団法人日本知的障害者福祉協会）より掲載。

◆ 川田　貞治郎（1879－1959）

川田は、1879（明治12）年茨城県真壁郡（現在の筑西市）の豪農の家に生まれる。長じて青山学院入学とともにキリスト教に入信し、青年期には宗教活動も盛んであったという。その後感化教育に従事し、さらに「低能児教育」に関心を深め、1911（明治44）年には茨城県渡里村に「私立日本心育園」を創設。16年「心育園」を閉鎖して知的障害児教育の先進国アメリカに渡ると、専門の研究と施設の運営方法を学び、日本に適した障害児の自立を目指す施設運営方針を構想した。

こうして帰国後の19（大正８）年６月、篤志家の中内春吉（藤倉電線創業者藤倉善八の弟）による土地の提供によって、東京府大島に知的障害児施設「藤倉学園」が設立されると、以来死去するまで常任理事・学園長として施設運営にあたった。加えて、戦後58（昭和33）年には東京都八王子に知的障害児入所施設の多摩藤倉学園を創設し、そのおよそ一年後の６月、80年の生涯を閉じている。川田の業績は、藤倉学園で行なわれた教育と処遇方法を「教育的治療学」と命名し、それを知的障害児の教育と保護の方法として確立しようと研究し、実践したことである。また長きにわたり「日本精神薄弱児愛護協会」会長（後に名誉会長）を務めた（以上、前掲書参照）。

ところで、長谷川は川田の没後まもなく、自ら理事長を務める学園の機関紙『大乗淑徳タイムス』第２号（昭和34年８月15日）に「川田貞治郎氏の訃」と題する一文を寄せ、その死を悼んでいるが、その文章から二人の出

会いや交友関係が浮かび上がってくるのである。かいつまんで紹介してみると、どのような因縁からか、川田は長谷川の実兄善治と親交があったこと。川田が米国から帰国して間もなくの頃、長谷川の経営する西巣鴨のマハヤナ学園の近所に彼が住んでいたので、時折顔を合わせることがあった。また滝乃川学園もマハヤナ学園の近くに位置していたので、相互に交親していた特殊教育界の重鎮である「石井（亮一）先生から川田先生のことを、しばしば聞知しておった」という。さらに、

> 私の舎弟分ともいうべき盟友岡野豊四郎氏が精薄児の教育に志を寄せて石井先生の門を叩き大島の川田園長の膝下に学んだこともあって、それや、これやで、年間、一度か二度位の面接しかない間柄であったが、然しつねに畏敬と親愛をもっておった。数年まへに図らずもララ物資の管理が、どうとやらで、役人の査察を受けるような場面に当り同氏とともに大憤慨を抱いて都庁に折衝したことがあったが、そうした事から一層親懇の間柄となった。

とあり、後述する「盟友岡野豊四郎」が教示を受けた縁などもあって、長谷川は川田に「つねに畏敬と親愛」の情を抱いていた。そのうえ、「ララ物資の管理」をめぐる役所の査察の一件（詳細は未調査）に二人とも「大憤慨を抱いて都庁に折衝した」という。そこからうかがわれるのは、つねに生活者や施設の子どもたちと共にあるという、筋金入りの民間社会事業家としてのプライドが共有されていたことであろう。

また、長谷川によれば、川田の前夫人が早世した後の現夫人（二十年来学園の教師として川田の片腕となった方という）との結婚式は、二人の令嬢の勧めで、令嬢の結婚式と同時に行なわれるというもので、その二重の悦びの案内状が自分にも届けられたので、「心から川田先生の困難な事業が、こうした家庭の補修営繕によって再出発を祝福した次第であった」と記している。長谷川自身も、苦闘10年にわたる協働者としての妻を亡くし、再婚して困難な事業を続けてきただけに、感慨深いものがあったに違いない。

川田との縁は、その後長谷川がブラジル開教事業に尽力していた二度目の渡伯の折、吉報をもたらすことになる。先の文章の続きには、次のように記されている。

> 前年、私がブラジルに於て、移民社会事業の一環として在伯日系コロニアの予想外に多い精薄児のことを想起し、誰か適当な教師を得たいと諸方を探しあぐねておったとき、偶々藤倉学園の川田先生の下で、六、七年御指導を受けたという市川（幸子―筆者註）女史のことを聞いて、この人こそ、最適任として、これを先生にお願いした処、長谷川氏のところなら、やってもよいというて、遂に、その話がマトマリ、いま現に日伯寺学園の、至宝として活躍しておるにつけても、先生に対する感謝と回憶は尽きないものがある。

長谷川は帰国後、川田の多摩藤倉学園を訪ねようと期していたが、多忙にかまけて果し得ぬまま川田の訃報に接したことを悔い、三田の教会での葬送の式に参列している。

◆ 岡野　豊四郎（1892−1964）

岡野は、1892（明治25）年茨城県筑波郡の豪農の家に生まれる。地元の中学校から東京府立青山師範学校に進み、1914（大正３）年３月に本科３学年を修了し、４月から石井亮一らの紹介で東京市養育院附属小学校知的障害児学級で教鞭をとった。後述するように、この養育院時代に長谷川との接点ができる。17年12月に同小学校を退職し、翌年１月同県人で水戸出身の北川波津が経営する児童養護施設「東京育成園」の駒沢分園、駒沢小学校に勤め、知的障害児の教育に「連関調和教育法」（身体的・知的・情的・意的な連関調和を図る）を開発する。21年２月妻を亡くし、失意のうち５月東京育成園を退職すると、９月に長谷川のマハヤナ学園に勤めるが、22年12月には郷里に戻って知的障害児施設の設立に動き出し、翌年４月に「筑波学園」を設立した。

その後彼は独自の連関調和教育を展開すべく尽力するが、経営的には苦労が絶えなかったようで、戦後51年、自らも関与した県立の知的障害児施設が設立されると、岡野は自分の施設を閉じて、筑波学園の名称と、収容児

岡野　豊四郎

出典：『天地を拓く－知的障害福祉を築いた人物伝－』（2013年、財団法人日本知的障害者福祉協会）より掲載。

20名と共に園長に就任し、56年定年退職するまで施設運営にあたった。59歳での決断であった。翌年、元の学園は「筑峯療」（71年に「筑峯学園」と名称変更して、県の再認可を受ける）と名を変え、長女和子が寮長となる。定年後の岡野は再び筑峯寮に戻り、病の中で子どもと職員と交歓しながら、64年に脳溢血で亡くなった（以上、前掲書参照）。

岡野がマハヤナ学園に在職していた期間は１年３ヶ月とわずかではあるが、「総務幹事」として、後述のごとく22年３月に長谷川が海外留学に発つと、約９ヶ月その留守中の園務を担った。時期は特定できないが、その後もマハヤナ学園の評議員を務めるなど縁は続いていたのである（『社会福祉法人・マハヤナ学園六十五年史　資料編』参照）。後年、長谷川は『大乗淑徳タイムス』特輯号（昭和34年11月７日）に「思い出の人々」と題して、「岡野豊四郎君のこと」を綴っている。そこではまず、長谷川自身が15（大正４）年、宗教大学を卒業するや、恩師渡辺海旭の指示により、当寺「人間の掃き溜め」といわれた東京市養育院巣鴨分院に見習いに入ったこと。その頃の分院における衣食住の劣悪な環境と想像を絶する労働条件下で、ついに結核の病に倒れてしまったことが記されている。そしてさらに、

> こうした分院生活を共にした奇人揃ひの中で後に自分の外遊中マハヤナ学園の留守役をやってくれ、後に筑波学園を創設して精薄児の特殊教育に全生涯を捧げた岡野豊四郎君から近来四大不調と聞いてさびしく思うていたが最近手紙をくれ、これを読んで懐旧慕情禁ずる所を知らない。

と記し、二人の出会いが養育院分院時代にあったこと、「盟友」岡野から手紙をもらって懐旧の情を募らせている長谷川の姿がそこにある。そして彼はこう続ける。この手紙はもとより二人の交友間の私事ではあるが、「朴々たる岡野君パーソナリテーの流露する所、老社会事業家の一面を示して若い方々の参考になるかと思う」といい、以下に原文を紹介して、「思ひ出す（ママ）人々」の巻頭を飾ると述べているのである。

手紙の内容は、たとえば、大正大学社会事業研究室の開設40周年記念式典開催の案内に関して、「『私がマハヤナ学園に在職中のこと』当時の思い出にて感慨無量」といい、また、長谷川のブラジル開教事業を仄聞してその健康を案じていたこと、「御寺の御造営も御完成なされて御帰朝、大正大学にて社会事業に挺身なされる学徒のためまだ御親切な御教授をなさること慶賀に堪へません。其の御元気は宗教家であるからと信じ感謝致しています」との言葉を送った後、自身のことについて、岡野はこう記している。

> 私は、私の好きな特殊教育の仕事に（ママ）「巣鴨の養育院分院時代大正三年四月から昭和三十一年五月まで、茨城県立筑波学園退職まで満四十三年間つとめました。退職の年齢が六十五歳であります。退職後は年のせいか、疲れを生じ、もともと酒好きの為めか動脈硬化病、また神経系を悪くし神経痛症となり一ヶ年ばかり病院にて静養致しました。（中略）尚ほ、真壁の御実家へ御出の際は御足労様ながら御寄り下さい御待ち申上げます。……目下「こちらは筑峰療と改め」……和子夫婦が主となってやっています。私は、毎日読書三昧、なにもせず隠居の状態であります。奥様へもよろしく申し伝えて下さい。（下略）

前掲の岡野の経歴をなぞるような記述もあるが、晩年の体調不良のなかで、若き日のマハヤナ学園のこと、大正大学社会事業研究室のこと、長谷川の社会事業教育やブラジル開教などに想いを馳せ、「其の御元気は宗教家であるからと信じ感謝致しています」とあるのは、岡野の真情の吐露というべきで印象的である。

長谷川と岡野の深い交友関係を伝える資料は他にもあるが、ここで少し異なる角度からもう一つ紹介しておこう。戦時下の頃であるが、岡野の長女和子（前掲）は長谷川の経営する巣鴨女子商業学校夜間部で専任教員をしていた。当時和子と共に同校に勤務していた吉田久一の証言を取り上げたい。周知のように吉田は、戦後の社会福祉史研究の第一人者だが、大正大学社会事業研究室における長谷川の教え子であり、長谷川の勧めで同校主事のポストにあった。彼が在職したのは41年４月から、43年９月までの２年半ほどだが、そのころの「忘れ得ぬ人びと」の一人に岡野和子をあげている。

岡野和子先生は夜学の専任教員で私の相棒である。精神薄弱児施設の名門筑波学園長岡野豊四郎氏の御息女で、現在確か茨城県で筑峯寮を経営しておられる筈だ。二年半御一緒したので思い出が多い。口数も余り多くなく、縫物等よく似合う先生で、生徒にとってよいお姉さんでもあった（「太平洋戦争下の生徒たち」『巣鴨女子高等学校五十年史』1982年、後に『吉田久一著作集』７に収載）。

ここで取り上げた、川田と岡野の二人と長谷川の交友関係は、もとより知的障害児教育・福祉という専門領域を超えるものであった。あえて言うならば、当時、社会的に不遇な状態に置かれていた人々を前に、果敢に社会事業の実践に挑む同志として、互いの人格と人格とが、魂と魂とが響き合うものであった、というべきかもしれない。

平成28年度淑徳大学アーカイブズ特別展

「知的障がい児福祉の先駆け ―踏むな　育てよ　水そゝげ：久保寺保久と八幡学園―」開催

淑徳大学アーカイブズでは、昨年11月５日（土）よりアーカイブズ特別展示室において、平成28年度淑徳大学アーカイブズ特別展「知的障がい児福祉の先駆け－踏むな　育てよ　水そゝげ：久保寺保久と八幡学園－」を開催しています。

本展示では、昭和３年（1928）東葛飾郡八幡町（現千葉県市川市）に、わが国で８番目の知的障がい児施設八幡学園を創設した久保寺保久を取り上げています。久保寺は当時多くの場合公教育から切り離され、施設や病院あるいは在宅での生活を余儀なくされていた知的障がい児に対して、「踏むな　育てよ　水そゝげ」をスローガンに常に園児一人ひとりに寄り添うことを心がけ、またいわゆる「芸能的教養」としてそれぞれの個性に見合った作業（絵画・工芸・園芸・縫製等）を指導することによって園児を支援しました。本展示の内容は次の通りです。

「第１章　八幡学園の創設者：久保寺保久」

昭和３年（1928）東葛飾郡八幡町（現千葉県市川市）に「八幡学園」を創立した久保寺は、全国の知的障がい児施設が協力しあい、知的障がい児の実情を外に向かって発信するために「日本精神薄弱児愛護協会」の設立に奔走（昭和９年設立）し、「精神薄弱児保護法」の制定を政府に要望する等、活発な運動を展開しました。彼の教育方針は、「個性の尊重」と「家庭愛」を基軸とするもので、児童を「友」とする心を何よりも大切にしていました。

「第２章　創設期の八幡学園」

設立したばかりの八幡学園では、施設に対する偏見を払拭し、地域の理解を得るために多様な「隣保事業」を展開しました。北八幡保育園もその一環でした。また、学園の教育は入園児童個々の特性に合わせて行われていたことが大きな特徴でした。

「第３章　戦争の時代を超えて」

昭和９年に市川に市制が施行されると学園周辺の宅地化が進み、教育環境が大きく変化したこともあり、昭和16年（1941）学園は現在地への移転を完了しました。戦争が拡大、深刻化すると学園は食糧自給を図るため、後援会の協力で無償提供を受けた「柏井農場」で、児童・教師一丸となって生産活動に力を注ぎました。しかし、昭和17年（1942）に久保寺保久がこの世を去ると、学園の運営は厳しさを増すこととなりました。

「第４章　『芸能的教養』を引き出す」

教育の一環として児童に課していた絵画や工芸などの

作業に注目した早稲田大学の心理学者戸川行男が、昭和13年（1938）に児童の作品展を開催すると大きな反響を呼び、以後各地で作品展が催され、満州や朝鮮へも作品が紹介されることとなりました。

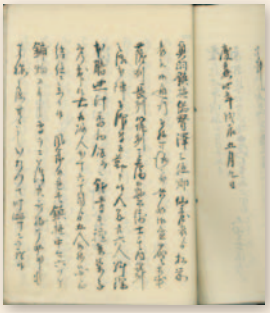
「第５章　園児の作品」

‘放浪の画家’山下清は昭和９年に八幡学園に入園すると貼り絵の作業に才能を発揮し、その作品は高い評価を得ました。このほかにも園児からは野田重博・沼祐一・石川謙二といった才能を生み出しました。

会　　期	平成28年11月５日（土）～平成29年４月28日（金）
会　　場	淑徳大学淑水記念館３階 淑徳大学アーカイブズ特別展示室
開催時間	10時～16時
問合せ先	淑徳大学アーカイブズ　TEL 043（265）7526

「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内

── 参加者を募集しています ──



淑徳大学アーカイブズでは、これまで地元の方々との交流を深めるため、「古文書に親しむ会」を開催しています。内容は、当アーカイブズが所蔵している史料をはじめとして、江戸時代から近代にいたる史料を幅広く読みながら、当時の社会や地域について学んでいこうというものです。

会は毎月第２・第４金曜日の午前10時から午後３時頃まで、淑水記念館で開催しています。どなたでも参加できますし、その日の都合に合わせて途中から参加いただくこともできます。初心者の方も大歓迎ですので、くずし字が読めるようになりたい方や昔のことに興味のある方はぜひ当アーカイブズまでご連絡下さい。皆さんで楽しく史料を読んでいければと思います。

淑徳大学アーカイブズ日誌（2016年7月～2017年1月）

7月12日	総合福祉学部山下幸子教授と今年度の特別展の打合せ。
7月13日	2016年度第３回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
7月16日	千葉・関東地域社会福祉史研究会第11回（2016年度）総会・研究集会参加（於東京キャンパス）。
7月20日	東洋大学の高野聡子准教授と八幡学園の展示について打合せ（於東洋大学白山キャンパス）。
7月20日	全国社会福祉協議会を訪ね灘尾弘吉の写真の件について依頼。
7月22日	第104回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会（史料講読会を改称）開催。
7月25日	千葉・関東地域社会福祉史研究会会報『せんかんニュース』第６号発行。
8月 1日	『淑徳大学アーカイブズ・ニュース』第13号発行。
8月 4日	本年度特別展の準備のため八幡学園訪問。
8月 5日	石津明彦氏より吉田久一関係資料寄贈。
8月 9日	福田会育児院史研究会資料整理参加（於福田会広尾フレンズ）。
8月10日	人文学部森田久男教授来室。
8月18日	本年度特別展の準備のため八幡学園で資料調査。
8月23日	2016年度第４回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
8月25日	本年度特別展の準備のため八幡学園で資料調査。
9月 1日	アジア国際社会福祉研究所藤森雄介教授より大学関係各種報告書類寄贈。
9月 6日	本年度特別展の準備のため八幡学園で資料の写真撮影。
9月 7日	淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会打合せ。
9月 9日	自校教育研究会の調査で大谷大学の山田恵文講師・西本祐攝講師に自校教育に関する聞き取り調査実施（於大谷大学博綜館）。
9月12日	看護栄養学部田代和子教授と学生110名アーカイブズ展示室見学。
9月14日	2016年度第５回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
9月15日	本年度特別展の準備のため八幡学園で資料の写真撮影。
9月20日	学園本部の中村博彦氏淑徳幼児教育専門学校の資料閲覧のため来室。
9月23日	第105回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
9月28日	本年度特別展の準備のため八幡学園で資料の写真撮影。
9月30日	マハヤナ学園創立100周年記念誌刊行打合せ（於学園本部）。
10月 3日	2016年度第１回淑徳大学アーカイブズ運営委員会開催（於学園本部）。
10月 5日	我孫子市の長沼友兄氏より山下清が描いた弥生軒の弁当の包み紙寄贈。
10月14日	第106回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
10月23日	埼玉キャンパス淑徳祭にて資料収集。
10月28日	淑徳大学アーカイブズ長谷川匡俊所長八幡学園の久保寺玲園長訪問。
10月28日	第107回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
10月29日	今年度特別展で展示する資料を八幡学園から借用。
11月 4日	東海大学学園史資料センターの椿田卓士氏展示見学のため来室。
11月 5日	淑徳大学アーカイブズ平成28年度特別展「知的障がい児福祉の先駆け―踏むな　育てよ　水そゝげ：久保寺保久と八幡学園―」開催。
11月 6日	人文学部杉原麻美准教授とゼミの学生３名特別展見学。

11月 8日	時事通信社千葉支局と東京新聞千葉支局が特別展の取材のため来室。
11月10日～11日	第42回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国（三重）大会及び研修会参加（於フレンテ三重・三重県総合博物館）。
11月11日	第108回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
11月12日	シンポジウム「吉田久一の歴史研究を問う―社会福祉史と近代仏教史の立場から―」開催（於淑水記念館２階多目的室）。
11月16日	『東京新聞』千葉中央版に特別展の記事掲載。
11月19日	地域社会福祉史研究会連絡協議会第16回研究交流会出席（於淑徳大学東京キャンパス）。
11月19日	東京キャンパス淑徳祭にて資料収集。
11月25日	マハヤナ学園の職員特別展見学。
11月25日	第109回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
11月25日	2016年度第8回福田会育児院史研究会出席（於福田会広尾フレンズ）。
12月 1日	第102回全国大学史資料協議会東日本部会研究会参加（於印刷博物館）。
12月 5日	マハヤナ学園創立100周年記念誌の打合せ（於マハヤナ学園撫子園）。
12月 9日	第110回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
12月14日	2016年度第8回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
12月15日	コミュニティ政策学部の本多敏明准教授吉田久一文庫閲覧のため来室。
12月21日	八幡学園の久保寺玲園長と松岡一衛理事特別展見学。
1月 9日	『千葉日報』電子版に特別展の記事掲載。
1月11日	2016年度第９回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
1月19日	人文学部歴史学科の教員８名学祖展と特別展見学。
1月26日	第103回全国大学史資料協議会東日本部会研究会参加（於東洋大学白山キャンパス）。
1月27日	第111回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
1月30日	展示のため借用していた山下清の貼り絵作品２点八幡学園に返却。

淑徳大学アーカイブズでは、大学及び大乗淑徳学園に関係する資料を広く収集しています。

❶ 大学及び学園が発行した新聞・雑誌・広報誌・年報・報告書等。
❷ 学生時代の写真・講義ノート・教科書・手帳・日記・記念品・記章・各種書類等。
❸ 学生時代に使用していたもの。
❹ 大学及び学園のサークルや研究会の活動を示すもの。

上記以外の物でも結構ですので、お気づきのものがあればお気軽にご連絡下さい。
また、大学及び学園の各部署や学部学科、機関で保存期間の満了した文書、あるいは廃棄の対象となる文書が発生した場合は、大学アーカイブズまでご一報下さい。

SHUKUTOKU
淑徳大学
アーカイブズ・ニュース　第14号
NEWSLETTER of
SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

発　行　日：2017年（平成29）２月20日
編集・発行：淑徳大学アーカイブズ
〒260-8701　千葉県千葉市中央区大巌寺町200
TEL 043-265-7526（直通）
e-mail : archives@soc.shukutoku.ac.jp